

# 火野葦平の〈戦争〉Ⅳ

——中国戦線からフィリピン戦線へ——

## 十六、〈旗〉と〈時間〉

一九三七（昭和一二）年七月一七日、蒋介石は抗日戦争完遂の方針を固め、七月三十一日、南京軍事委員会において抗日戦時体制を決議する。そうした中国の動きを見据えた日本陸軍総司令官の松井石根は軍隊を南京に前進させる。一月一〇日、光華門を占領し、一週間後の一七日に南京入城式が行われた。南京陥落後、蒋介石はやむなく拠点を徐州に移した。日本軍は蒋介石を追うように翌一九三八年二月一日、黄河作戦（徐州作戦）を敢行し、三ヵ月後の五月二〇日に北支方面最高司令官・寺内寿一は徐州に入城を果たす。北支・中支から蒋介石を追い払った日本は、二月一四日、北平（北京）に中華民国臨時政府を樹立し王克敏を行政院長に任命、さらに翌年の三月二十八日には、南京に中支那派遣軍の指導で中華民国新政府が樹立され、梁鴻志が行政院長に任命された。徐州陥落後の九月二二日、こうした圧倒的な軍事的背景の下に、主席委員王克敏を中心にして中華民国政府連合委員会が

## 石崎 等

北平に成立するに至るのである。いわゆる「傀儡政権」の成立である。以後、天津英仏租界への交通を制限する措置を講じたりするなど北支・中支における日本の軍事的プレゼンスは強化されていく（一二月二二日）。王克敏の中華民国政府連合委員会は日本が考えているようには満足に機能しなかった。ちなみに、南京攻略作戦を指揮した松井石根は極東軍事裁判において「南京大虐殺」の人道的な責任を問われてB級戦犯として刑死した。

日中関係は依然として重慶に政府を置いた蒋介石の存在を無視することはできなかった。一方、毛沢東らの共産党勢力の存在も脅威であった。徐州平定後の膠着した中国内外の状況を打破するために軍部は新たな展開を模索した。こうして杭州攻略作戦が練られたのであった。

軍部は一九三八年一〇月一二日未明、広東攻略作戦（南支那攻略作戦）を敢行する。広東は一九三三年一月、共産党軍と協定を結んで「人民政府」を樹立した第一九路軍の拠点であった。この作戦は一年以上も案が練られたもので、一九三八年一〇月一二日午前三時三〇分に極秘の中で開始された。従軍した火野らが待

機していた船団の停泊港は台湾の基隆<sup>キリン</sup>らしかった。作戦は一〇月二二日、わずか一〇日間で終了する。陸空共同で行われたこの電撃作戦は、中国軍の敗走と撤退によって日本の勝利に終わった。火野葦平は例によって『海と兵隊』を『東京日日新聞・大阪毎日新聞』を発表した。この従軍記は『広東進軍抄』と改題されて一九三九（昭和十四）年三月に新潮社から出版された。<sup>1</sup>

広東の都市に踏み込んだ火野はここで戦争で何を見たのだろうか、あるいは見たとしても何を書かなかったか。それは一体どのような背景をもったものであったのか。

無人化した市中に、何者かによる放火、略奪する老婆たち、癩に冒された乞食の姿が描かれている。そして驚くべきことに、日本兵の姿——広東省政府・広東省政府民政庁の看板を掲げる大きな門の前で万歳をする日本兵のたわいない写真が挿入されていることである。<sup>2</sup> さらに注目したいのは、この小説のラストには火野の植民地主義者としての素朴ともいえる面貌が〈旗〉と〈時間〉によって表象されていることである。（幾つもの外国旗を眺め、私は何か腹立たしい思ひに駆られ、その中にわれわれの美しい旗を一時も早く一番高いところに立てたいと思つた。）（一〇月二二日）というように。<sup>3</sup>

「おうい、時間を合はせてやるぞう。」

と門の所で兵隊の怒鳴つてゐるのが聞えた。（略）私達はほんとうの標準時間など今まで全く判らなかつたのである。

各々の時計は悉く異つた時刻を示し、どれが正しいのか全く判らなかつた。

「おうい、これは日本の時間だぞう、六時四十三分ぢや。」とその熊のごとき兵隊は銅鑼声で叫び立てた。無電カラチオかで合はせたものらしい。

（……）私もポケットから時計を取り出し、その時刻に合はせた。（一〇月二三日、『広東進軍抄』二一四頁〜二一五頁）

戦記は兵隊たちの各々違う時計の針を〈日本の時間〉に合わせる儀式めいたシーンで終わる。兵隊の時計はまちまちであつたのだろうが、綿密な作戦を展開する上で兵隊たちが統一的な時間を持ち得なかつたことに驚かされる。

しかし、このふたつのエピソードから何を讀み取ることができようか。それは政治的意思決定によって新たに生み出された時空間に基づく管理の有様である。以後、改易が行なわれ、諸外国の旗に代わつて各地に日本国旗が翻翻とひるがえり、〈日本の時間〉に合わせて宮城へ向けて遥拝がとり行われることだろう。

兵隊のひとつひとつの振舞いや言葉にはある真実が隠されている。火野を含め兵隊たちの単純なナショナルリズムの高揚から占領下の広東を蔽いつくす儀式が暗示されている。意図的に時空間の中で生起したいくつかの事象をラストで集約・統一するねらいが濃厚な終わりのシーンは、もうひとつの興味深いエピソードによって補強される。

火野の眼は梢に吊るされたカナリアの鳥籠に注がれる。籠の底に敷かれた現地の新聞紙には中国軍の虚偽の戦勝が大々的に報じられている。そしてその記事の上にはカナリアの糞が垂れていた。虚偽の報道に対して〈美しい小鳥〉の糞がそれを汚すという構図

である。これを単純に、醜悪な中国の現実と美しい日本の行為の対比を読み解くのは誤りだろう。(美しい小鳥)を日本のメタファーと解するのはいかにもあざとい。だとしたら、(美しい小鳥)は日本が期待する協力的な中国人を意味しているのだろうか。籠の鳥というイメージには中国の良心と美が暗示されているようにも思われる。いずれにせよ、そこには作者の巧みなフィクションとレトリックがあったように思われる。こうした火野の文学精神は従軍記とは別の形で結晶することになるだろう。広東が落城したとき、両親と生き別れて街に倒れていた李雪英という中国人の少女の物語である『花の命』(一九四二・一〇、実業之日本社)がそれである。宣撫班の体験を生かしたこの小説の主人公である音楽家志望の李雪英は、日本名の愛称「雪子」で呼ばれ、「僕」が所属する宣撫班で献身的に働く。一年後に書かれた『真珠艦隊』(一九四三・七、朝日新聞社)などと並ぶ子供向けのものだが、池田浩士は「火野葦平の戦記文学においてメールヒエンの要素がどのような意味をもっているかを見るうえで、もつとも重要な作品のひとつ」であり、「戦争責任を示すもつとも歴然たる証拠」と位置づけ鋭く批判した。<sup>4</sup>

ところで、『広東進軍抄』には情報メディアとしての写真が作品を補完するように挿入されている。その数は二六枚。『麦と兵隊』の写真よりも積極的な意味が持たされている。特に「敵のトーチカ」(九二頁)、上田戦車部隊の進軍写真(一八五頁)、「わが荒鷲の広東爆撃」(一九五頁)「見事な爆撃のあと」(一九七頁)などは火野の従軍記の質を明らかに変えるものであった。しかも火野は原隊から離れ、トラックで移動する従軍活動が主たるもの

だった。仲間の戦死や負傷や激戦の様子などは伝聞によって知ることができなかった。兵隊の行軍のつらさと自分の地位の歴然とした差異に心を痛めるのだった。

一方、広東を守る第一九路軍ならびに抗日組織は南京で起きた惨劇を回避するために、市民を香港ならびにその周囲の租界や外国人の教会や病院へ積極的に避難させ、日本軍に利するような市内の主要な施設を爆破したり破壊したりして機能不全に陥れる作戦を遂行した。すべて南京究の教訓が徹底したのである。

中国戦線に従軍し、多くの戦闘を目撃してきた火野葦平にとって、言語が違い、気質や風習の違う広東人もまた中国人であることに変わりはなかった。彼らの顔はさしあたり兵士によってしか示されていない。彼らとの関係や新しく生まれた状況の裏にはある真実が隠されていることだろう。多くの死骸への言及は辟易するが、中国人としての他者は軍隊を離れて投降してきた捕虜しかなかった。市中を彷徨っているのは、略奪をほしきままにしている老婆や乞食たちばかりであった。この不思議な光景が(広東)作戦のすべてを物語っているように思われる。

在野の中国学者だった後藤朝太郎は中国各地に旅し、陋巷から聞えてくる胡弓の音色を聞き分けられるようになって、しばし涙し感傷にふけることがあったと記している。京劇は聴劇ともいわれ、二胡や胡弓の音色をともなつて演じられるとき、中国人の音楽性は民族的に高度に洗練されたものとして表出される。豪華な劇場からうら寂れた裏街にいたるまで、二胡や胡弓によって語られるうたは民衆のこころを貫いている。

火野葦平は最初詩人として出発した。(戦記もの)といわれて

いる長篇小説や気軽に書かれた短篇小説やエッセイのたぐいの底流に（うたと感傷）が確固として存在していることはあまり問題にされてこなかった。

火野は中国戦線で兵士・陸軍報道部員として、あるいは制圧後の宣撫工員として、中国社会の階級差——富者と貧者の圧倒的な落差に直面した。しかし貧者を存在論的に下位に置くような考えをもたなかった。たとえば、二胡や胡弓ではないが、月琴をかき鳴らす盲目の乞食のことが「盲妹の話」という文章の中で印象的に書かれている。この随筆は一九三九（昭和一四）年一〇月に執筆され、随筆・小品感想集『河童昇天』（一九四〇・四、改造社）に収録された。そのまえに、同じ改造社から企画出版された『新日本文学全集 第二六卷 火野葦平集』（一九三九・一二）にも収められている。

戦禍に曝された広東の町に集まってくる泥棒や乞食や盲目やかさかきの群の中に、盲目の（乞食）がいるが、その盲目の男が奏でる月琴の響きが強烈な存在感を示して描かれている。そうした醜態ともいえる底辺の人間に視線を注ぐ作家の姿勢にとっても興味を懐かせられる。同時代、小山いと子は乞食を描いた短篇を残した。森三千代の長篇『あけほの街』にも、人間と歴史を総体的に捉えようとするヒューマニティーの眼差しが感じられる。底辺社会に向けられたこうした素材は、高所から中国の政治を論ずる評論家やジャーナリストなどの目にはとまらないものだった。文学者だけが時代の証言者としてテキスト化することができたといつてよいだろう。

長い日中戦争時代に書かれたおびただしい中国ものに眼を通し

ていると、ときに文学者が中国民族・中国文化の鉅脈に鋭い鶴嘴を打ち込んでいく精神の姿に出逢うことがある。火野葦平もそうした記録資料を残した一人であった。火野は後藤朝太郎と同様、中国底辺の民衆に眼をそそぎ、（うたと感傷）に浸ったが、（戦争）という深刻な現実、火野にもうひとつの顔を持つことを強いていった。

## 十七、丹羽文雄との交流

一九四〇（昭和一五）年一月、火野は丹羽文雄に宛てて次のように書いた。

現在僕のおちいりつつある危険な地域についても君は兄貴のやうに注意してくれる。たいへんありがたい。僕はいつの間にか戦争文学者にされ、兵隊作家にされてしまったことがくすぐたく、早くそのやうな看板は外したいと思つてゐる。そのことは僕が兵隊を愛し、これからも兵隊のことを書き、また、戦争を取り上げて書いてゆきたいといふこととは別のことである。いや、このことは僕の一生の仕事にしたいとも考へてゐるのである。（『丹羽文雄への返信』、『河童昇天』（一九四〇・四、改造社）一六二頁～一六三頁）

この返信は、芥川賞の重みに耐えながら作家道に精進する覚悟が表明された文章として注目されるが、大事をとり、へまをやりたくないという慎重な姿勢もまた濃厚である。丹羽に宛てて表明

された（一生の仕事）にしたいという火野の夢想的野心は、先走って言ってしまえば、フィリピンからビルマへと戦争体験が拡大され、拳句の果て、日本の敗戦によってもろくも潰え去る。いやインパール作戦の失敗を描いた『青春と泥濘』（一九五〇・三、六興出版社）にそれが集約されているという見方もあるだろう。

しかし中国との一五年戦争については（僕の一生の仕事）として満足な完成をみることはなかったといえるのではないだろうか。

兵隊を愛した火野の（戦争）は盧溝橋事件に始まり、上海事変を経てさらに南京、徐州、漢口へと戦火が拡大し、広東・海南島・汕頭（シアン）にまで及んでいった。『糞尿譚』によって第六回（昭和一二年下半年期）の芥川賞を受賞した火野は、現役兵であったために小林秀雄が戦地に赴いて賞の伝達式が行なわれた。その後も相次ぐ攻略作戦に従軍した。広東攻略作戦からは陸軍報道部に所属し、自分の小隊を離れて各新聞社の従軍記者と行動を共にし、敵前に自分の身をさらした。そうした（戦争）との積極的なかかわりによって、『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』『広東進軍抄』『海南島記』など（戦争文学）に新しい領域を切り拓くことができたのである。

一九三八（昭和二三）年四月末、火野葦平は馬淵逸雄陸軍中佐（のち大佐）の計らいで中支派遣軍報道部に転属する。五月、徐州作戦に従軍して軍曹に昇級する。ここから兵隊にして報道部直属の報道員としての活躍が始まる。九月には上海を訪問したペン部隊の久米正雄、片岡鉄兵、林美美子らを案内した。一〇月に原隊復帰をとげるが、広東攻略作戦に従軍するに際しては、朝日新聞・大阪毎日新聞・同盟通信ら新聞社特派員のグループと一緒に

なり、行動をとにもするようになる。彼らは行く先を知らされな  
いまま、兵隊とともに（御用船）に缶詰にされた、たぶん台湾の基隆  
とおぼしき港で長い間停泊待機させられた。広東攻略作戦はわず  
か一〇日間の短期決戦だったが、バイアス湾敵前上陸―惠州―広  
州にいたる行軍と戦闘の苦難は想像を絶した。火野葦平は久米正  
雄の求めに応じて、その従軍記を『海と兵隊』と題して『東京日  
日新聞』『大阪毎日新聞』に発表した。このタイトルはバイアス  
湾上陸までしか著しておらず相応しくないと判断されたのか、単  
行本で出版するときには『広東進軍抄』と改題された。（〇〇と  
兵隊）という長篇戦記シリーズに終止符が打たれたわけだ。

丹羽文雄との書簡のやり取りの中で（兵隊もの以外の小説を書  
くことを恐れてゐるのではないか）と問われたという（丹羽文  
雄への返信）、『河童昇天』一六三頁）。もとより謙虚な火野は、  
丹羽に指摘されるまでもなく自分の文字に満足な見通しなど持つ  
てはいなかった。『麦と兵隊』の出版に際しての前書きにすでに  
それが表明されている。

私は戦場のさなかにあつて言語に絶する修練に曝されつ  
つ、この壮大なる戦争の想念の中でなんにもわからず盲目の  
ごとくになり、例へば私がこれを文学として取り上げる時期  
が来ましたとしましても、それは廻か先の時間のことで、何  
時か再び故国の土を踏むを得て、戦場を去つた後に、初めて  
一切を回顧し、整理してみるのでなければ今は私はこの偉大  
なる現実について何事も語るべき真実の言葉を持たないので  
あります。私は戦争について語るべき真実の言葉を見出すと

いふことは私の一生の仕事とすべき価値のあることだと信じ、いろいろな意味で、今は戦争について何事も語りたくないと思つてゐたのです。しかしながら、また、別の意味で、現在戦場の中に置かれてゐる一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも、また、何か役に立つことがあるのではないかと考へ、取りあへず、ありのままに書きとめて置くことに致しました。(傍点引用者)

火野の〈戦争〉像の構成要素は、時代を反映して皇軍・聖戦・兵隊たちの強さ、純粹さ、美しさ、そして死を怖れない勇猛さなどに集約される。そこに火野の偏りとゆがみを見ることはたやすい。しかし火野ほど純粹に兵隊を信じていた作家はいなかった。

しかしここでは、〈壮大なる戦争の想念〉もそれについて〈語るべき真実の言葉〉も何ら語られていない。〈戦争〉について一生の仕事とすべき価値あるものであるがゆえに、〈語るべき真実の言葉〉の表明は回避されている。それは謙虚さの表れだろうかそれとも巧みな遁辞だろうか。たぶん両方であつたらう。しかし除隊後故国の土を踏んでも、火野にへ一切を回顧し、整理してみる時間を許さなかつた。陸軍軍曹までになつた元の兵隊を作家生活に専念させることを許さなかつた。宿命ともいえる重荷を背負つて突き進んでいくしか道はなかつた。丹羽文雄の危惧もそこにあつたといえるだろう。火野自身は〈戦争文学〉としてカロツサの『ルーマニア日記』のような文学を理想としていた。いづれにしろ、文学的主題としての〈戦争〉とそれに対する認識が従軍記の第一作にあつたことを見逃すべきではない。

……僕自身が生れて初めて課せら(れ)た言語に絶する修練に曝されてゐるのであるが、しかしいま僕がそれを語るには僕はあまりにもその大いなる現実のさ中にありすぎる。僕は歐洲大戦が終つて十年の歳月を経てはじめて「西部戦線異状なし」や「一九〇二年級」「ルーマニア日記」など優れた戦争文学が生れたことの意味がおぼろげながらわかる気がする。僕は戦場を去つて後はじめて静かに戦場の真実を見つめ、戦場の想念を整理しなければ僕にはいま何事も語る資格がない。〔西湖畔より〕、『河童昇天』一二三頁

文末には(十三年二月。杭州)とあり、親友の画家青柳喜兵衛に呼びかける形式のエッセイになっている。火野はここで一歩踏み込んで本音を吐露している。すなわち火野が考える〈戦争文学〉の理想がある。それは馬淵逸雄の深慮からの背信を意味している。しかし時局の急展開は火野が意図していた〈戦場の哲学〉を深めさせることなく、ラマルクやカロツサが第一次世界大戦で書き残したような〈戦争文学〉を完成させることはできなかった。

火野はむしろ中支から南支へと拡大された戦線を追いかけるようにして〈戦争〉と一体化することに専心した。その異例ともいえる情熱は(現在戦場の中に置かれてゐる一人の兵隊の直接の経験の記録)への執念となつて結実した。(語るべき真実の言葉)は不十分かも知れないが、とりあえず残しておくという情念が先行した。そしてそれが火野の文学活動のエンジンとなつた。

約二年間の従軍によって押しも押されぬ〈戦争文学者〉

〈兵隊作家〉の代表的存在となった火野はもとよりそれに満足などしてはなかった。そうした呼称は〈くすぐつたく、早くそのやうな看板は外したい〉と考えていた。しかし兵隊を愛していた——戦争を愛していたわけではない——火野は丹羽文雄の言葉を借りれば抜き差しならない〈危険な地域〉に踏み込んでいた。陸軍情報部との関係は容易に断ち切ることができなかった。国民やメディアは『糞尿譚』の作家ではなく『麦と兵隊』や『土と兵隊』の作家をなによりも求めていたからである。初期中国戦線の記録資料というべき『麦と兵隊』は刊行後一二〇万部のベストセラーとなった。『土と兵隊』は田坂具隆監督によつて映画化された。そうした時代状況の中では、じつくりと腰をすえて創作に専念する余裕などなかった。従軍中や駐屯地での警備、宣撫活動の間合間にあつて〈語るべき真実の言葉〉を探しつつ〈一人の兵隊の直接の経験の記録〉を手帳にメモしそれを作品というかたちで再構成していった。それが火野の文学活動の中核であつた。たとえば火野の記録することへの執念を大阪朝日新聞の従軍記者末常卓郎は次のように書き残している。

友軍の砲撃が劇しくなると次第に敵の射撃は衰へを見せて来た。僕は何時の間にか玉井軍曹がトラックの蔭に足を投げ出して、丹念に何か手帳に書き続けてゐる姿を見付けた。彼は僅かな小休止の時間でもよく手帳を出し、再び読み返す時があつても彼自身が判断するに困難を感じるだらうと思はれる程細かい字で、例へば自分の歩いて来た道の一草一木の姿をも逃すまいと言ふ風に万年筆で書き込んでゐるが、いま戦

闘中でも忘れずに、その万年筆を走らせてゐるのである。「火野軍曹が書いてゐる。……」これは僕の頭にはつきりとして自分が従軍記者であると言ふ意識を甦へらせた。一軍曹である彼が書き、従軍記者である自分が呆然と銃鉄砲に心を奪はれてゐる。その僕自身は、いま何のメモをつけておかうにも、万年筆も鉛筆も手帳もみんな凶囊に入れたまゝ、トラックの上には放り出して来たのである。僕は今更にこの「麦と兵隊」の作者の不屈の意力を立派なものに思ひ、しみじみとその顔を贖めるのであつた。〔従軍記者〕(一九四〇・二、中央公論社)二一五頁(二一六頁)

火野にとつて戦場で手帳に書くという行為は兵隊が銃を撃つことと同じであつたらしい。いかなる状況においても〈書く〉ことに徹した火野の勇敢な行為は新聞記者の職業本能を目覚めさせるが、そこは歴戦の兵隊上りの報道班員と初陣の新聞記者との違いであり、末常は火野からちびた鉛筆と一枚の紙をもらつてかろうじて戦闘状況のメモをつけるのであつた。以来、末常は尊敬の念を強くする。

## 十八、戦後経営と文化的宣撫活動の構想

火野葦平は一九三七(昭和一二)年九月に日華(日支)事変を機に応召し、それから満二年二月中国戦線を転戦し、一九三九年一月に軍曹の階級で現地除隊となつた。その間に『糞尿譚』によつて芥川賞作家となつた。火野、三二歳から三四歳の壮年期

に当たる。以後〈戦争三部作〉を世に送りながら、そうした体験からいくつかのエッセイや講演・放送などで自分の考えを発信していった。主たるものを順に列挙すれば次のようになる。

『兵隊と兵隊』（一九三八年一〇月一九日、広東放送局より放送）＊『随筆 珊瑚礁』（一九四二・五、東峰書房）収録。

『戦友に懇ふ』（一九三九年六月、汕頭）

『戦場より』（一九三九年六月、汕頭）

『帰還兵士の言葉』（一九三九年一月）

『戦後建設の一問題について』（一九三九年一月一七日、早稲田大学講演）

『戦線の友に』（一九三九年二月）

『丹羽文雄への返信』（一九四〇年一月）

火野は『兵隊と兵隊』で〈兵隊の感情〉〈兵隊同士といふやうな気持〉について必死に思索をめぐらせている。それは日中の戦闘終了後、敵同士でありながら愛国的な精神を持つ〈兵隊〉であるならば、その愛国的な純粹行為が互いに手を結んで融和し、戦後の復興に協力できるのではないかという夢想である。ここには火野の政治オンチと非現実的な認識の甘さがあった。惠州のトーチカに立てこもって〈中華民国万歳〉と言って玉砕する中国兵と〈天皇陛下万歳〉と叫んで死んだ日本兵が融和し合い互いに協力することなどありうるだろうか。ここには日本と中国は文化的に同種同文で、唇齒輔車の兄弟の関係にあるという安易な前提がある。それも丹念に読むならば、火野は目撃したわけではなく伝聞情報によって夢想を語っているのである。たとえば、足を鉄の鎖

で縛られた中国兵が、たった一人で日本軍に抵抗したとされる話、また日本兵は死の直前に口を動かしたが、声を発したわけではなく、看取った兵隊の推測によって〈天皇陛下万歳〉が読み取られたという具合である。こうした強引な意味づけはいかにも苦しい。足を縛りつけて撤退した中国兵の非情をいかに日本兵が呪ってみたところで、死の現実の前に効力はない。火野は武士道的な精神のある中国兵を尊敬する。しかし正規の中国兵なら、飛行機爆撃と戦車砲撃による圧倒的な軍事力で自国が侵略され、同胞が殺戮され、多くの市民が流亡生活を強いられる日本の植民地主義的侵略行為を許容するはずがない。そんなことは分かっているのに、軍情報部所属の立場にあるかぎり、あえて夢想を膨らませ記録資料として公にせざるをえない苦しさがある。

ところで、火野の戦記や随筆には中国の看板、広告、宣伝、キャンペーン、新聞記事など文字の執拗な蒐集が見られる。この情熱は異文化への興味と抗日運動の把握の両面からきたものだろう。この問題は文化宣撫活動の深層をあげます。すなわち火野（つまり日本人）の他民族に対する言語理解への不安（裏返せば、言葉の不得手への防御的姿勢）と検閲つまり報道の自由制限のための情報集めである。火野は〈指導者的国家〉の振る舞いの危険性に無自覚であったとしか思われぬ。

### 十九、母校早稲田大学での講演

火野が早稲田大学で行った講演は、一九三八（昭和一三）年一〇月二二日に敢行された広東占領後の体験が基になっている。作



戦に参加した立場から（戦線に於いて、戦闘直後に於ける凡ゆる文化方面の建設、政治、経済の方面の建設が実際どんな状態であるか）という現状報告と（戦線に於ける知性）（インテリゲンチアの使命）（指導者的の覚悟）などについて述べたものであった。概して高給取りであった将校などの職業軍人ならいざ知らず、応召された兵隊は安い俸給で命の危機に直面するわけだから、内心不満を蓄積させる。鉄のような組織である軍隊はそうした不満分子を（教育）によっていち早く摘み取っていた。

兵隊は死を賭して戦うのだから、その代償として国民に何かもたらされるか、どういう利益を受けるかという点に無関心ではいられなかった。もし正当な（戦争）の大義がなく、多額な軍事費を使い、作戦に多くの兵を投入しているにもかかわらず、国民が何の裨益を受けず、しかも戦っている兵隊に対して冷淡であったなら、兵隊は自分たちが（戦争機械）の一部品であり、自分たちの（戦争）もその死も無意味ではないかという疑問を抱くだろう。ひいては駒のように使い捨てになっているのではないか、という不安も働く。兵隊たちの唯一の救いは内地の人々の理解と支持であった。軍上層部はそうした兵隊の不平不満を慰撫するためにいろいろなことを考案した。

一、国民に嘘の情報を流して世論をコントロールし、兵隊に慰問品を届けるようにする。

二、戦地における中隊・小隊などの功績に対して司令官による「感状」を出して士気を鼓舞する。

三、将兵の奮闘を評価し、さらに奮励するために天皇による御嘉賞のことは授与する。後年に顕著になるが、こうした

パフォーマンスは、制空権がなく、飢えと濃霧と烈風の下でのアツツ島玉砕やパラオ諸島のペリユリユー島守備隊の善戦などに対してしばしば行われ新聞によって報道された。戦死者の名前の公表なども行われた。

火野は最も効率的な銃後の戦果を問い、その障害となるものが何であるかを見据えていた。一九三九年一月一七日に行われた講演『戦後建設の一問題について』はそうした（問いの構造）に対する真摯な回答といつてよいだろう。

## 二十、岩上順一の発言

岩上順一は『戦争文学の展開』という評論のなかで、火野葦平、上田廣、日比野士朗、里村欣三らの文学活動によって戦争文学はひと通り出尽くしたとして、彼らの仕事と対比させて所謂従軍作家の仕事について次のように述べている。

彼等の文学は、実生活的に戦争のきびしいモラルのために戦はねばならなかつたところの兵士達の文学にくらべて、どうしても数歩を譲らなければならなかつた。彼等はあくまでモラルの傍観者、観察者であつて実践者でないのに対し、火野葦平、上田廣、日比野士朗、里村欣三等の作家は、どこまでも身を以つて、かゝるモラルの実現のために、苦しみ耐へねばならなかつたといふ、実践者の持つ強く深い生活内容が、我々を感動させるからである。『展望・現代日本文学』（昭和一六年三月、修文館）四〇五頁）

ここには〈戦争〉が持っている〈きびしいモラル〉という至上の理念が強く感じられる。〈戦争文学〉の基盤にある〈戦争のきびしいモラル〉〈実現のために、苦しみ耐へねばならなかつたといふ、実践者の持つ強く深い生活内容〉というモラル・スタンダードからみたら、作家の傍観的な戦争参加による文学など足下にも及ばないという価値観が露呈している。この頃の岩上の日中戦争観は、アジアの解放、アジアにおける恒久平和の実現という〈聖戦〉の〈モラル〉に第一義を見ようとしているのである。だから兵隊の立場に身を置かない従軍作家の〈戦争文学〉は、火野葦平らの文学に一籌を輸するというわけであろう。自己を滅却して兵士側に立つか、それとも自己保存の本能を捨て切れなくて傍観者の立場に立つか。〈戦争〉という複雑な真実を明らかにする文学の効果——それがもしあるとしたら——については問わない。あくまでも実践者のリアリティーにこだわろうとする。傍観者であることは〈人間の最もきびしく誠実なるモラル〉である〈死〉からはほど遠い。ここには梶井基次郎や志賀直哉の透徹した私小説的なリアリズムを否定する文学観の傾きがある。

しかしだからといって火野が梶井や志賀の私小説的リアリズムを軽視しようとしていたわけではない。むしろ伝統的リアリズムの強靱さを知悉していたがゆえに自分の〈戦争文学〉に懐疑的であったというべきなのだ。

〈戦争文学〉は岩上順一がいうように〈死に對する態度、即ち人間の最もきびしく誠実なるモラル〉のために戦う兵隊の姿を描くことだけが目的であろうか。それは理想としてはありえたが、

実情は違っていた。火野葦平の『麦と兵隊』（一九三八・八）『改造』やその続篇ともいえる書下ろし長篇『土と兵隊』（一九三八・一一、改造社）が発表された年は、蘆溝橋事件の勃発から二年目にあたり、日中戦争は泥沼に入りつつあったが、その年は石川達三『生きてゐる兵隊』（一九三八・三）『中央公論』、上田廣『黄塵』（一九三八・一〇）『大陸』、丹羽文雄『還らぬ中隊』（一九三八・一二）一九三九・一『中央公論』など話題作が発表された年でもあった。火野・上田は〈兵隊作家〉、石川・丹羽は〈従軍作家〉とカテゴライズされた。岩上は後者を〈従軍記者的傍観者の立場〉から書かれたものだとする。しかし『生きてゐる兵隊』や『還らぬ中隊』は〈モラル探求の実生活的な切実性が欠けてゐることのために、その見事な自己犠牲といふ主題が、生命の危険との冒険的な戦ひ、或ひはスリル等の末梢的テーマにすり替へられてきてゐる〉ような欠点をもった小説といえるだろうか。違うような気がする。そしてそれが〈従軍作家達の戦争文学の致命的な欠陥の一つ〉とまで言い切つてよいとは思われない。のち火野は除隊して陸軍報道班員の任務を背負い、いわゆる従軍作家となる。そうした火野の〈戦争〉とのかかわりは、岩上の認識とは違い、ファイリピン戦線において〈戦争〉のイデオロギーとその質の違いとして表れてくる。

岩上順一の論理に従えば、どのような戦争も兵隊たちが〈死に對する態度〉で〈誠実なるモラル〉を実践しているがゆえに肯定されなければならないことになる。

M・フーコーは〈近代の人間はというと、政治において、生ける存在としての自分の生が問いただされる動物である〉（『知へ

の意志」末尾の言葉」と述べた。火野葦平は〈軍隊〉という拘禁状態の中で〈自分の生〉を凝視し、そこに置かれた〈剥き出しの生〉の意味を問おうとした。しかし彼の場合〈政治において〉という視点が決定的に欠落していた。石川達三や丹羽文雄ら従軍作家には、火野のような〈剥き出しの生〉の意味を問う精神が稀薄だったことは確かであろう。しかしそうした問いが可能性をもっていたのは中国との〈戦争〉の場合においてであり、太平洋戦争に突入して以後、火野や上田廣らが報道班員という身分で従軍したフィリピンでの〈戦争〉については当てはまらなかった。さらにいえば、火野の文学と〈戦争〉哲学は敗戦への道を突き進むに從つて機能不全に陥つていった。新たに生じたそうした問題系は、火野が残した〈戦記もの〉を徹底的に読み込むことによつて検証されなくてはならない。

## 二十一、ひとつのエピローグ

一九四五年八月、火野葦平はフィリピン戦線ものの集大成といふべき『陸軍』を朝日新聞社から出版する。この長篇は一九四四（昭和一九）年五月一日から翌年四月二十五日まで『朝日新聞』に二七四回に亘つて連載された。その「後書」で太平洋戦争末期における〈二年間の周囲の変貌〉について次のように書いている。

私は「陸軍」のなかで、日本軍の比島攻略のことを書いたのであるが、現在は敵アメリカの反攻をルソン島に邀へて、ふたたび全比島は修羅の巷と化してゐる。バタン半島にも

敵は上陸した。懐しの古戦場はすべて新戦場となつた。比島の思ひ出は消えないのに、マニラ市は兵燹の街となり、エスコルタ街、リサール街等は猛火につつまれてゐると新聞は報じてゐる。高木伸太郎が病床の上で散華したマニラ陸軍病院はどうなつてゐるであらう。白衣のシスタ・フランシスカはどうしたらう。かういふ凄絶の戦局のただなか、小説「陸軍」が上梓されることは感慨無量といふ言葉では尽されないものがある。剣と歌との結合によつて、日本臣民たる道をうち樹てたい念願はいよいよ深まるばかりである（傍点引用者）。

末尾には「二月七日識」とある。ここには現実とフィクションの見事な交配がある。そしてその奥に〈剣と歌との結合〉を指す火野の最後ともいえる情熱がある。この情熱は〈新戦場〉という凄惨な現実を目撃し体験していかない分空回りしている。〈念願〉は〈悲願〉となる。〈比島の思ひ出〉は消えることはなかつたであろうが、報道班員としての従軍記はさておき、フィクションを交えた戦話譚は一気に色褪せる。それは火野の〈戦争〉が一方的な観点から捉えられていたためにプアーな面を持つていたからではないだろうか。小説『陸軍』は火野の〈戦争物〉の集大成だが、フィリピン戦線の推移と〈戦争〉に対する認識の変化によつて、小説の最後が初期フィリピン戦線を舞台にしているにもかかわらず、マリアラ熱に罹つた主人公・高木伸太郎が密命を帯びて戦線から離脱している間に、自分も弟の仁科禮三中尉も属している時川部隊がアメリカとの死闘の果てに玉砕するというストーリーを創出する。ここでは、現実にあつたフィリピン兵との戦闘は消去

され、アメリカ軍が前面に出て白兵戦が展開される。伸太郎は過酷な任務を果たしたのちに病気の悪化によってマニラの陸軍病院に入院し、フィリピンの修道女であるフランシスカの手厚い看護を受けているが、見舞いに来た義兄の参謀友枝中佐から仲間たちとともに弟の禮三も戦死したことを知らされる。火野が従軍した東岸部隊は上田廣が所属していた西岸部隊にずらされ、繰り返しアメリカ兵との遭遇がなかったことにこだわってきた不満は解消される。伸太郎が応召以来、死にいたるまで携えていた赤瓢箪が乃木希典大将の愛用の品であったことを含めて、玉碎は〈陸軍〉——国家への御奉公——靖国神社への遺族参拝として貫流し完結されるストーリーを形成し、強固なイデオロギーと化している。火野はこの長篇で玉碎という思想を前景化し、そこに念願の〈剣と歌の結合〉の力を借りることによって自己の死を絶対化させようとしていたように思われる。

なお、火野は『陸軍』を脱稿後、四月、三月八日から始まったインパール作戦に報道班員として従軍する。切れ目のない、慌ただしいともいえる火野の〈戦争〉は、作戦の中止と撤退に至るまでの半年間の従軍で四冊の「従軍手帖」を残した。近年、その全貌の翻刻が『インパール作戦従軍記』（二〇一七・一二、集英社）として刊行され注目された。戦後、長篇『青春と泥濘』を執筆する際の基礎資料となったものだが、そればかりではない。この膨大な詳細な従軍記は、『陸軍』に接続する戦時下の〈戦争〉というものがある。重大な危機を迎えようとしていたことを意味する。火野輩平にとって、中国戦線からフィリピン戦線を経てビルマへと拡大された戦争の記録遺産として重要であるばかりでなく、末常卓郎

が驚嘆した〈書く＝記録する〉行為の頂点に位置しているからである。

## 注

- (1) この従軍記には短篇「煙草と兵隊」が収録されている。
- (2) 『広東進軍抄』（一九三九・三、新潮社）二〇五頁。写真といえは、この本には中山大学文学院校舎前における火野輩平の肖像写真が収められている。
- (3) 『広東進軍抄』二〇六頁。
- (4) 『火野輩平論』（二〇〇〇・一二、インパクト出版会）四八～四九頁、五五頁。
- (5) 拙稿「租界地 天津 曙街一森三千代『あけほの街』における感性と身体」（『立教大学日本文学』第八四号）参照。
- (6) 『河童昇天』（一九四〇・四、改造社）や『百日紅』（一九四一・一二、新聲閣）に収録された随筆感想類には、火野の文学観・思想・人生観がもつとも鮮明に表明されている。人口に膾炙した〈戦記もの〉がボジだとしたら、これらの文章はネガに相当する。これに対して『兵隊について』（一九四〇・一二、改造社）は記録性の強い戦記的エッセイであり、『随筆 珊瑚礁』（一九四一・五、東峰書房）は銃後の問題に力点が置かれている。
- (7) この小説には、奉天に在住し満洲人やその風土に理解を示す半面、鴉片を商売とする落魄した大陸浪人・高石清二郎が登場し、主人公と五年ぶりの再会を果たすというプロットが仕組まれている。こうした人物は、明治時代以来多くいたであろうが、作品の本質と深くかかわっているわけではない。

（いしぎき ひとし 本学名誉教授）